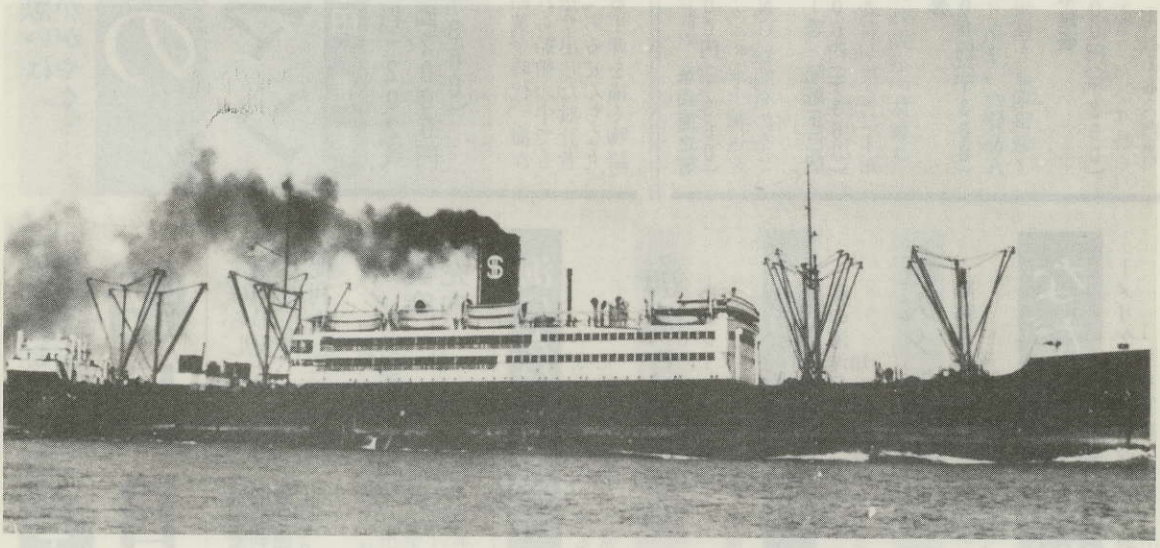
もとプレジデント・ハリソン

勝　鬨　丸

《主要目》客船、日本郵船運航、10,509総トン、
主機三連成レシプロ２基、出力6,500馬力、航海速力12ノット、
船客定員78人（竣工時）、1921年ニューヨーク造船所建造

日本に接収された米国の太平洋横断航路客船

写真はプレジデント・ハリソン当時の姿



日本客船史の暗黒部分「拿捕客船」

明治から現代までの客船史の上で、その実体がどうしてもつかめない客船群がある。

第二次大戦中、日本が海外で接収した（または購入した）一連の外国客船である。

これについては、これまで公表資料が皆無であり、その全体像は今もって不明である。また、個々の船が、どうのような経過で接収され、どのように運航されたかについても、分からないことが多い。

第二次大戦勃発後、極東には、ドイツ、イタリアをはじめ欧米の船が多数逃避しており、船不足に悩んでいた日本の船会社は、先を争って、これら外国船の購入交渉を進めた。しかしながら、めまぐるしい国際情勢の変化と購入価額交渉の難しさのため、民間だけの力では、なかなか成果を挙げるまでに至らないのが実情だった。

そこで政府は、政府監督のもとに外国船の購入とチャーターに当たる会社を設立する方針を固め、日本郵船、大阪商船など大手船会社九社に協力を求めたのである。こうした経緯で一九四〇（昭和十五）年七月、資本金一千万円の国策会社「帝国船舶株式会社」が東京に設立された。創立後同社は、翌一九四一（昭和十六）年二月までに、ドイツ、ノルウ

ェー、ギリシャなどから船舶十一隻を購入し、船会社にその運航を委託した。

さらに、太平洋戦争開戦後は、占領地で日本軍が拿捕した外国船の管理も委託されたので、同社の業務は急増した。これらの船はいずれも、大手船会社に運航委託され、一九四二（昭和十七）年四月の船舶運営会の設立後は、同運営会がチャーターしたのである。

今回紹介する「勝鬨丸」（かちどきまる）は、こういった拿捕客船の一隻である。

前身は米国の太平洋横断航路客船

「勝鬨丸」の前身は、米国ＡＰＬ（プレジデント・ライン）の太平洋横断航路客船「プレジデント・ハリソン」である。

同船は、第一次大戦末期に、ＵＳＳＢ（米国船舶院）が計画した五〇二型軍隊輸送船の転用貨客船で、竣工当時は「ウォルヴァリン・ステーツ」と称し、パシフィック・メイル社の運航により太平洋横断航路（サンフランシスコ～極東間）に就航した。その後、ＵＳＳＢからＡＰＬの前身ダラー・ラインに売却され、「プレジデント・ハリソン」と改名、引き続き太平洋水域で稼働した。

太平洋戦争が勃発した一九四一（昭和十六）年十二月八日、開戦を上海で知った「ハリソン」は、直ちに抜錨して母国に逃げ帰ろうとしたが、出航後間もなく日本航空隊に発見された。

早速、軍命を受けた上海航路の韋駄天客船「長崎丸」の追跡を受け、揚子江河口の余山島で着底したところを、海軍艦艇によって取り押さえられたのである。

拿捕された同船は、「勝鬨丸」と改名。一九四二（昭和十七）年三月に、日本郵船に運航委託された。次いで同年七月、大阪に回航され、大阪鉄工所桜島工場で修理。同年八月（または九月）、台湾への航海に就き、米と砂糖を満載して清水に帰港した。同船を一目見ようという見物人で、清水港は時ならぬ賑わいを見せたという。

拿捕で「北京原人」の頭骨が行方不明に

同船の拿捕は、日本がまだ戦勝気分に酔っていた緒戦のころの事件であり、国内でも大きな話題となったが、この一件にまつわる別のミステリーについては、今もって、真相不明のままである。

それは、拿捕のどさくさに紛れて、同船に乗せていた「北京原人」の頭骨が行方不明になったことである。

古生人類の典型として知られる北京原人の化石は、一九二九（昭和四）年秋に、北京郊外の周口店の石灰岩洞窟でスウェーデンの地質学者アンダーソンによって発見された。以来、日華事変が起きる一九三七（昭和十二）年までの間、七個の頭骨を含む四十体の北京原人の骨が発掘された。発掘は、米国のロックフェラー財団などの資金援助により行われたものである。

日米開戦が近くなった一九四一（昭和十六）年夏、日中間の戦乱で貴重な原人の骨が散逸することを恐れた米国と中国の学者は、これを米国に移すことを決意。北京原人の化石で最も完全な形を残しているボーリン教授発見の頭骨を主体に、これらを二個のトランクに詰め、鉄道で秦皇島に陸送したのである。

次いで上海までは船便で送られ、前述の十二月八日、上海からフィリピン経由で米国に向かう「ハリソン」に積まれた、とされている。

北京原人の骨は、一体全体、どこへ行ったのだろう。

ミステリーが未解決のまま、同船は一九四四（昭和十九）年九月十二日夜半、帰還軍人、傷病兵、豪州軍捕虜など約千八百人を乗せてシンガポールから門司へ帰港する途中、海南島沖の南シナ海で、米国潜水艦「パンパニート」の雷撃を受け沈没。四百八十八人の乗船者と乗組員が、同船と運命をともにした。

（山田　廸生）